百々裏語（28）

おもてあきら

【観世流という言い方について】

江戸時代の言葉の研究に没頭しておられる前田金五郎さんから、〃観世流という言葉はいつ頃から使われていますか〃と聞かれたことがある。

とっさに、室町時代から使っているんじゃないでしょうかと答えてしまったものの、確信はなかった。古い用例がなかなか見つからないということだったので、一緒に調べてみたが、なるほど、容易には見つからない。ありそうに思った『四座役者目録』にも無いし、『わらんべ草』にも無かった。皮肉なことに、後者には「金春流」の用例があるのに、目的の「観世流」は無いのである。けれど、金春流という言い方があるからには、観世流という言い方も江戸初期には行われていたに相違なく、力を得て探索しているうちに、やっとのことで、万治三年（一六六〇）刊行の観世流小型謡本（刊者名なし）の奥付に、

右百番者観世左近太夫入道黒雪章句写焉
世間雖有観世流之本依非直本之写而其謬多今以直本改文字仮名正章句令開板者也
万治参庚子仲春吉旦

とあるのを探し出した。これが前田さんの手持ちの用例よりも少々古い例だったので、辛うじて面目を保ち得た有様だった。

その後、鴻山文庫蔵の細川十部伝書の中の一冊である『節章句秘伝之抄』（種々の伝書の寄せ集め）の末部に収められている、永禄三年三月二日の年記を持つ温泉彦次郎久永の伝書に、

一、観世流にくると付を、金春流にしほると付也。又観世流にもしほると云ふし有。『今ぞしるみもすそ川の流には』

という記事があるのを見つけ出した。永禄三年（一五六〇）ならば、どうやら室町時代と言えようから、前田さんへの私の返答が間違いではなかったことになろうが、実のところ、もっと古くからの言葉であるように私は思いこんでいた。が、「金春流」の用例としても右の温泉彦次郎久永の伝書の記事が管見では一番古いから、永禄頃が観世流という言葉の上限であるらしい。観世座の系統の芸風を観世流と言い、金春座の芸統を金春流と称する言い方は、なかなか便利であるように思われるが、能の世界でなんとか流と言うようになったのは、比較的後のことらしいのである。

もっとも、私が用例を探し出せないだけのことで、かなり古くから使われていたのではないかとの疑いも、当然あり得ようから、もう少し検討してみたい。

世阿弥の伝書には、前回にも引用した『三道』の「当流の先士観世」をはじめ、「当流」という言葉がしきりに使われている。また、金春禅竹あての佐渡からの書状に、

……鬼の能ノ事ウケ給候。是ハコナタノリウニワシラヌ事ニテ候。……力動ナンドワタリウノ事ニテ候。……

とあって、「こなたの流」とも言い、「他流」という言葉も使用している。私が観世流とか金春流とかいう言い方がかなり古くからあるように誤解していたのも、右のような「流」の使用法がある事に由来するらしい。だが、金春とか観世とかの固有名詞に「流」をつけた用例は、世阿弥の伝書には一つも無いのである。世阿弥だけではなく、金春禅竹の伝書にも、金春禅風の伝書にも、「当流」「一流」はあるが観世流や金春流は無い。その他、永禄以前と見なされる能の伝書類は、かなり広く調べてみたつもりであるが、どれにも用例を見出だせなかった。ただ、禅竹の子の金春宗筠の伝書であるかのようによそおっている

『宗鶴袖下』の巻頭に、「金春流詠口伝集」とあるのが例外であるが、この本は、慶長頃の写本もあって室町末期成立の伝書には相違ないものの、宗鶴の伝書ではあり得ず、恐らくは温泉彦次郎久永伝書と同じ時代の成立で首書の「金春流」云々の文句は、更に後年に添えられた題名かと思われる。

なおまた、禅竹の、『浄土教自力他力批判』と通称されている書物に、

……愚意に存ズル趣、是等ノ儀勢ヤ、若シ根本西山ノ流義ニ出テ、深草流ト立ラレタル所ニテ可レ在ト覚ユ。

という一節があり、「深草流」（浄土宗西山派四流の一）なる用例が見える。このことは、ある源から分れたある分派をなんとか流と呼ぶ言い方が、少なくとも仏教関係では禅竹の頃に既にあったこと、及び能役者がそのことを知っていたことを物語っている。だが、そのことがすぐさま観世流・金春流などの言い方が行われていたことを暗示するとは言えまい。「流」という言葉の使い方を広く調査した上でなければ断定できないことであるが、芸道や学芸の系統や分派を固有名詞プラス流の形で示す言い方は、江戸時代に入ってから広まったもので、室町中期にはまだ限られた範囲内でしか行われていなかったらしいからである。後世なんとか流と通称されている室町中期以前から存在した種々の方面の流派でも、辞書類の用例（なるべく古い用例を探して掲げるのが通例）では、ほとんど室町時代の例があげられていない。むしろ禅竹伝書に見える「深草流」が、珍しく古い部類の用例であるらしい。世阿弥や禅竹が大きな影響を受けている歌道の方面でも、たとえば『正徹物語』の冒頭に、

此道にて定家をなみせん輩は冥加も有るべからず、罰をかふむるべき事也。其末流、二条・冷泉両流と別れ、為兼一流とて三の流れ有りて……

とあるなど、「一流」「両流」とは言い、また二条家を意味する「当流」の語も使用されていたが、二条流とか冷泉流とかは言わなかったらしい（『日本歌学大系』総索引による）ことも参照すべきであろう。（歌道の場合でも、江戸時代になると「冷泉流伊勢物語注」（謡曲拾葉抄）などの言い方が行われている。）

以上に考察したようなことから、観世流・金春流などという言い方は、用例が見出だされる永禄三年からさほど遡らぬ頃、室町末期頃から使われ初めたと考えたいのである。それが江戸時代になって、旧来の大和猿楽四座の他に喜多流が生まれるに及んで、なんとか流という言い方が漸次広まり、各座内の三役諸流の独立性の強化がそれに拍車をかけ、明治維新による座の崩壊が、なんとか流の言い方を最も普通の言い方として流布せしめるようになったかと思われる。同じ「観世流」であっても、室町末期のそれが観世座全体の芸統を意味したのに対し、現在のそれが、シテ方観世流とか太鼓の観世流とかの、狭い範囲の芸統を意味するように変っていることも注意すべきであろう。

室町中期まで、なんとか流という言い方が能の社会では行われていなかったろうと考えるもう一つの理由は、観世流・金春流という便利な言い方が既にあったのなら当然その言葉を使用してよさそうなところに、実質的には同じ意味内容を持つ別の言葉が使用されていた事実である。単に観世・金春だけで観世流・金春流と同意の場合もあり、観世方・金春方という場合もあったが、特に近いのが京がかり、大和がかり、観世がかり、金春がかりという言い方である。これらの言葉については、今も盛んに使用されている上がかり・下がかりの語とともに、次回に考察したい。